
人魚たちの復讐

空さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人魚たちの復讐

【Nコード】

N0716X

【作者名】

空さん

【あらすじ】

あたしはどこにでもいる 中学一年生の女の子 山口美心 あたしが小学生の時に通っていた 人魚水球クラブで事件が起きて…
どうやら幼なじみの 高崎健太くん（呼び名：健ちゃん）もその事件に関わっているらしく… 迷探偵が今… 動き出す！？

ブローグ

あ
開けてはいけない
ドア
この扉は

あ
開けてはいけない
ぜったい
絶対に

むね
胸の鼓動が
こどろ
からだ
身体に張り付いた
みずぎ
水着の中で
なか
それをあたしに
つた
伝えようと
している

ぬ
濡れた髪から
かみ
タイルにそっと
ひとすく
一滴

あ
それがまるで
あいす
合図かのように

あ
あたしは静かに
しず
ドア
扉ノブを回し
まわ
き
気づかれないように

覗^{のぞ}き
見^みた
倉^{そう}庫^こ
の^{なか}中^{なか}
を

1 突然の死

「美心
起きなさい 美心！」

お母さんの声が
あたしの鼓膜を
揺さぶる

眠気眼で
ベッドから起き上がってみれば

「おはよう… と言っか
もうお昼過ぎよ
一体いつまで
寝てるつもり？
中学生になつてから
初めての
夏休みでしょ？
しっかりしなさいよ」

お母さんは
そう言ってから

あたしの部屋へやの
カーテンを
ゆっくりと開あける

「…おはよう」

あたしが目めを擦こすりながら
まだ半分眠はんぶんねむっている
脳のうミソで
そんなお母かあさんの様子ようすを眺ながめていると

…あれ？
何なんだか お母かあさん
いつもと雰ふん囲いき気が
違ちがうような…

普ふ段だんは
お気おに入いりの
可かわ愛あいいヒヨコの柄がらが
入はいった
エプロン姿すがたの
はずなのに…

今日きょうは 黒くろ…
うん やっぱり黒くろは
女おんなを美うつしく魅みせる

って言うからね

お母さん
何の変化か
イメージチェンジ…？

…うん？
よく見ると 違う
…あれ？
お母さん 喪服姿？

少しはつきりしてきた
脳ミソが
活動をONに
切り替える

「お母さん
その格好…
誰か 亡くなったの？」

あたしは布団の中から
抜け出すと
ベッドに腰掛けながら
尋ねる

「そうなのよ…
美心

落ち着いて聞いてね

さつきね

マーマイスイキムウ

人魚水球クラブの

三枝

三枝コーチから

電話

電話があつてね

風間

風間コーチが

亡くなつたつて…」

「えっ!？」

風間コーチが…?

なんで?

どうして?」

パニくりそうな自分を

何とか抑え込みながら

あたしはお母さんを

見つめる

お母さんは

そんなあたしの隣に

腰掛けると

「お母さんも

さつき

聞いたばかりでね

あまり詳しくは

ないんだけれど…

「どうやら
水球クラブ活動中での
事故死らしいわ」

「そう言っ
てあたしの頭の上に
優しく掌を置くと続ける

「何でも
タイトル拾いゲーム？
が原因とか…
プールの中で
亡くなったらしいわよ」

「風間コーチが…
死んだ」

「若くて爽やか
絵に描いたような
体育会系のイケメン
確か今は
大学の四年生だった
はず…」

「あたしが水球クラブに
在籍していたときには

保護者^{ほごしや}からも
他の^{ほか}コーチ^{こーち}からも
とても人^{にん}気^きがあつて
信^{しん}頼^{らい}もあつて
面^{おも}白^{しろ}くて
明^{あか}るくて…

…そんな風^{かざ}間^まコ^こーチ^ちが
死^しんだ…

「それでね 美^み心^こ
美^み心^こはもうお世^せ話^わには
なつていないと言^いつても
やっぱりお母^{かあ}さん
手^て伝^{つた}いに行^いこうかと
思^{おも}つて…
健^{けん}太^たく^くんのお母^{かあ}さんと
一^{いっ}緒^{しょ}に
これ^{これ}から風^{かざ}間^まコ^こーチ^ちの
ご自^じ宅^{たく}に
行^いつて来^くるわ」

お母^{かあ}さん^{さん}はそう言^いうと
あ^あた^たし^しの頭^{あたま}の^{うえ}上^{うへ}に
置^おいて^ていた^の掌^{ひら}で
あ^あた^たし^しの頭^{あたま}を
軽^{かる}く^くポ^ポン^ンと叩^{たた}くと

「さあ
お母さん出掛けるから
さっさと起きてちょう
だい
ご飯は
一階のテーブルの上に
置いてあるから
温めて食べてね
それとお父さんは
お仕事で出掛けている
から
お留守番しつかり
頼むわよ」

そう言っ
て
部屋を出て行っ
た

あたしは何だか
信じられない気持ちで
風間コーチの
日に焼けた笑顔を
透き通った声を
思い出して
いた

2・探偵誕生？

あたしが普段着に
着替えて
一階に降りて行くと
リビングのテーブルの上には
ラップのかかった
オムライスと
温野菜のサラダが
置いてあった

こんなときに
食欲なんて
湧かないよ…
とは言いたいけれど
やっぱりそこは
中学一年生だし
食べ盛りだし…

何だか変な言い訳を
自分自身にしながら
あたしはラップのかかった
オムライスを
電子レンジに入れて
温め始める

その間に
冷蔵庫から
牛乳を取り出して
コップに注いで
ついでにドレッシングを
温野菜のサラダに
かける

ちょうど
温め終わったオムライス
電子レンジから
取り出して
椅子に座ると
一人モクモクと
食事を始めた

…うん！
やっぱり
お母さんのオムライスって
美味しい！

単純にそんなことに
感激しながら

でも
満腹中枢が
少しずつ満たされてくると

いつの間にか
あたしの気持ちは
必然的に
風間コーチのことで
いっぱいになって
いった：

今から二年前

あたしが

小学五年生のときに

発足した

人魚水球クラブ

風間コーチは

その先生の

一人だった

当時はまだ

確か大学二年生で

それでも

小中高大学と

水球一筋な

水球大好き人間

人魚水球クラブを

発足はつそくさせた
徳川とくがわコーチと共ともに
後進こうしん育成いくせいのために
学業がくぎょうと両立りょうりつさせながら
一生いっしょう懸命けんめい頑張がんばっていた

まあ…
水球すいきゅうクラブといつても
あたしを含ふくめて
生徒せいとはたつたの
1人にん…

しかもその内うち
女の子おんなこは
あたし一人ひとりだけだという
弱小じやくせう初心者しんしやクラブだったのだけれど…

あたしは
食べ終おわった食器しょっきの残骸ざんがいを
キッチンキッチンの流し場ながばまで
運はこぶと 洗あらい始はじめる

ひねった蛇口じゃぐちから
溢あふれ出る水流すいりゅうが
何なんとなく
プールの水みずを

思い出させる

正直なところ
あたしは特別
水球自体に
興味があつた訳じゃ
なかつた：

ただ
幼なじみの
健ちゃん
水球を始めると
言い出したので
あたしもそれに
くつついて
強引に入部したような
感じだった

家の近所に住んでいて
いつも一緒に遊んでいた
“健ちゃん”こと
高崎健太くん

両親同士が
仲が良かった
ということも

あつただのだけれど
それ以外にも

幼稚園

小学校と

ずっと同じクラス

なぜか中一になった今も
同じクラスの腐れ縁

ここまでくると

幼なじみというか
何というか…

周りの友達からはよく

“あんた達

付き合ってたの？”

なんて言われるけれど

決して

そんなんじゃないくて…

友達以上

恋人未満

みたいな…

幼なじみ特有の

独特な関係というか…

…あれ？

あたし何で

こんなこと

考えてるんだろう…？

食器を洗い終えて

濡れた手を

タオルで拭きながら

あたしは首を傾げる

…そうそう！

あたしは風間コーチの

ことについて

考えていたんだった

健ちゃん

あたしの関係は

今はどうでもいい

それにしても…

あたしの脳裏に

ふと疑問が

思い浮かぶ

あんなに水球に
慣れ親しんでいた
風間コーチが
そう簡単に
プールで事故死だなんて
あり得るのだろうか？

確かに
体調が悪かったり
予期せぬことでの
事故死は
あり得るとは
思っただけけど…

あたしはキッチンの
流し場の前で一人
腕組みをして考える…

何となく気分は
名（迷？）探偵チックだ

でも
今のところ

いくら^{かんが}考えても
どんな^{じょうきょう}状況での
事故^{じこ}死^しだったのか
それが分^わからないと
何^{なん}とも 言^いえない…

…！

そうだ！
健^{けん}ちゃんなら
幼^{おさな}なじみの健^{けん}ちゃんなら
その^{じょうき}状況^{じょうき}が
分^わかるかもしれない！

あたしは
小学校^{しょうがっこう}卒業^{がく}と同時に
人魚^{まへい}水球^{すいきゅう}クラブを
きっぱりと辞^やめたけれど

健^{けん}ちゃん^{ちめい}は確^{たし}か
中^{ちゅう}一^{いち}になっ^{いま}た今^{いま}でも
コ^こーチ^ち補^ほ助^{じょ}みたい
後^{こう}輩^{はい}の
小^{しょう}学^{がく}生^{せい}達^{たち}の育^{いく}成^{せい}に
水^{すい}球^{きゅう}ク^くラ^らブ^ぶへ行^いくつて
言^いっ^てて^いたよう^なな…

あたしはポケットから
急いで携帯を
取り出すと
健ちゃん宛に
メールを打ち始めた…

3・連絡

ええつと…

あたしはポケットから

携帯を取り出すと

健ちゃん宛に

メールを打ち始める

トウ：健ちゃん

件名：今何してる？

本文：風間コーチのこと

聞いた？

From：美心

送信ボタンを押して

5分もしない内に

健ちゃんから

返信メールが届く

トウ：美心

件名：Re 今何してる？

本文：今家

聞いたも何も

俺 オレ その場 ば にいた
から

From: 健太 けんた

やっぱり…

あたしは一人 ひとり
携帯 けいたい に向 む かって
小さく ちい 頷 うなず きながら
メール メール を打 う ち返 かえ す

To: 健ちゃん けんちゃん
件名: Re Re Re
今何 いまなに して

本文: 色々 いろいろ と
大変 たいへん だった
でしよう?
大丈夫 だいじょうぶ ?

From: 美心 みこ

同 おな じように
5分 ふん もしない内 うち に
健ちゃん けんちゃん から
メール メール が届 とど く

トウ | To : 美心
けんめい
件名 : Re Re Re
いまなに
今何して

ほんぶん
本文 : 大丈夫

みこ
美心のお父さん

から

すこ
少し事情

き
聞かれたくらい

フロム
From : 健太

そつか

とう
うちのお父さん 今日

しごと
仕事だつて

かあ
お母さん言つてたもんね

でも

とう
お父さんが

かざま
風間コーチの件に

かか
関わっている

ということは

かざま
風間コーチは

じこ
事故死じゃない可能性が

あるってこと？

すこ
あたしは少しの間

腕組みをして
考え込んでから

再びメールを
打ち返す

トウーけん
To: 健ちゃん
件名: Re Re Re Re
いまなに
今何し

ほんぶん
本文: 変なこと聞いて

ごめんね
風間コーチ
事故死じゃないの?

フロム
From: 美心

こんど
今度は少しだけ
健ちゃんから
メールが届くのに
時間が掛かった

トウーみこ
To: 美心
件名: Re Re Re Re Re
いまなに
今何

ほんぶん
本文: いや
事故死だって
美心のお父さんは

言^いつてたけど
美^み心^こ
今^{いま}
家^{うち}？

From: 健太

このメールを受け取って
何となく

あたしは心のどこかで

ホッとしていた

そして再びふたたび

メールを打ち返す

トウ
ー
：けん
健ちゃん

件名: R e R e R e R e R e R e
今

本文：うん

今^{いま} 家^{うち}にいるよ

From: 美心

するとすぐに

健康ちゃんから

返信が来る

トウ
ー
:
美
心
みこ

件名: ReReReReReRe

本文：今から
そっち行っても
いいか？
メールよりも
色々話せると
思うから

From：健太

確かに
直接会って
話すほうがいいかも…

あたしは一人
携帯に向かって
メールを打ち返す

To：健ちゃん
件名：ReReReReReRe…

本文：分かった
待ってるね

From：美心

このメールを

打ち返^{うかえ}してから
15分^{ふん}もしない内に^{うち}
健^{けん}ちゃんは
あたしの家^{うち}にやっ^きて来た

まあ…
あ^{ある}る歩^ふけば5分^{ふん}とも
掛^かからない
ご近^{きん}所^{じょ}さんなんだけれど…

げんかん
玄関^{げんかん}のチャイムが鳴^なって
出^で迎^{むか}えたあたしに

えんそ
プールの塩素^{えんそ}で
すこ^{すこ}ちやいろ
少し茶色^{ちやいろ}くな^{かみ}った髪^{かみ}と

たいよう
太陽^{たいよう}からの紫^し外^{がい}線^{せん}で
ひや
日^ひ焼^やけた顔^{かお}の
けん
健^{けん}ちゃんは

「よっ！」

ひとこと
そう一言^{ひとこと} 挨拶^{あいさつ}してから
いつものように
くったく
屈^く託^{たく}のない顔^{かお}で
ほほえ
微笑^{ほほえ}んだ

4・幼なじみ

あたしは健ちゃんを
リビングに通すと

「オレンジジュースで
いい？」

そう言いながら
自分はキッチンにある
冷蔵庫へ向かう

健ちゃんは
リビングの椅子に
腰掛けながら

「この猛暑の中
歩いて来たんだぜ？
氷入りカルピスで
よろしく！」

なんて言う

猛暑の中
歩いて来たって言うけど
健ちゃんの家と
あたしの家

片道かたみち5分ふんも

掛かかんないじゃない…

本当ほんとうにもう！

…なんて思おもいつつも

あたしは

「はいはい」

そう言いいながら

冷蔵れいぞう庫こから

ミネラルウォーターと

カルピスの原液げんえきを

取とり出だすと

カルピスをつつくくり始はじめる

そんなあたしに向むかって

健けんちゃんは

「はい」は1回かい！だろ？」

なんて偉えらそうに

言いってくる

あたしは冷蔵れいぞう庫こから

氷こおりを取とり出だして

カルピスはいの入はいった

コップに
いくつか入れると
それをお盆ほんに載のせて
健ちゃんけんが待まつ
リビングのテーブルへ…

健ちゃんけんの座すわっている
テーブルこおりいの前に
氷入りカルピスを
トング！と置おくと

「はい！」

と言いってから
健ちゃんけんを
少しすこ睨にらんだ

そんなあたしを見みて
健ちゃんけんは

「か、軽かるいジョークじゃ
ねえか
こんなことで
怒おこんなよ…」

と少しすこビクついている

あたしは何だか
こころあたた
心が暖かくなつて

「軽いジョークじゃない」

そう言い返して
ほほえ
微笑んだ

そしてあたしは
けんちゃん
健ちゃんの正面の椅子に
こしか
腰掛けると

「それで
かざま
風間コーチのこと
なんだけれど…」

話題を切りか
わだい
話題を切替えるように
いう
言う

けん
健ちゃんは
の
飲んでいたカルピスの
コップを
テーブルの上
うえ
ていぶるの上に
お
置いてから

「うん…
やまぐち
山口にも以前
いぜん

すこ 少しだけ 話したかも

オレ しれないけど

俺さ

しょうこう そつぎょう 小学校を卒業しても

すいきゅう たまに水球クラブに

ほじょ コーチ補助として

てつだ 手伝いに行つてたんだ

きょう こぜんちゅう 今日の午前中も

そうだつ たんだけど…

やまぐち 山口 覚えてる？

と タイル取りゲームの

こと」

ちゅうがく はい 中学に入ってから

けん 健ちゃん

あたしのことを

こえ 声に出しては

“ みくちゃん ” とも

“ 美心 ” とも

よ 呼ばなくなっていた

そして気がつけば

あたしのことを

みょうじ やまぐち 苗字の “ 山口 ” と

よ 呼ぶようになっていて…

そしてあたしも

気がつけば
健ちゃんのことを
二人以外のときと
親しい人の前以外では
“高山くん”
と呼ぶように
なっていた

「タイル取りゲーム…
確か
プールの底に落ちてる
色付きのタイルを拾う
ゲームのことだね？」

あたしがそう言っていると

健ちゃんは頷きながら

「そう それ
それを風間コーチと
生徒のみんなで
一緒にやってて
その最中に
コーチが溺れて…」

健ちゃんはここで
一呼吸置くと

「…そのまま
亡^なくなっ
たんだ…」

そう言^いってから

あたしを

真^まっ直^すぐに 見^みた

5・刑事の娘

健ちゃんけんの瞳ひとみの中なかに
あたしが映うつっている…

あたしは何故なぜだか
この瞬間しゅかん

このままこのことを
何も知しらないほうが
いいような気きがして

思おもわずフツ…と
その瞳ひとみの中なかから
飛とび出だすように
視線しせんを逸そらした

それでも
父親ちちおや譲ゆずりのDNAディーナエヌエーが
心こころの中なかのどこかで

あたし自身じしんが
納得なっとくするまで

知しるべきなんだと
見みるべきなんだと

確かに
静かに
蠢いて
いる…

あたしは
健ちゃんの瞳を
見つめ返すと

「…そう
風間コーチのこと
その場にいたのなら
かなりのシヨック
だったよね…
…あと
うちのお父さんの
ことも
大丈夫だった？
失礼なこと
言わなかった？」

あたしがそう尋ねると
健ちゃんは頷いて

「ああ
俺は全然大丈夫
風間コーチには
悪いけど
まあしょうがない

「って言うか…
山口の父さんのことも
プールの横にある
事務室で
みんな順番に
簡単に事情を
聞かれたただだから」

「健ちゃんはこちらで
両手を組んで
頭の後ろに添えると
軽く天井を
見上げるように」

「でもやっぱ
山口の父さんって
普段はそんな風には
思わなかったけど
刑事なんだな
って感じたし
思ったよ…」

「そう言っ
て
微笑んだ」

「その微笑みに
あたしも釣られて」

一緒に微笑むと

「うん
なら良かった
何だかごめんね
色々変なこと
聞いてちゃって…」

そう小さく言った

健ちゃんは
そんなあたしを見て
わざと大袈裟な口調で

「何言ってるんだよ！
幼なじみの
愛しい俺様ことを
心配してくれたん
だろ？」

悪戯っぽくそう言う

やかんの中の水が
一瞬で沸騰するような
感じ…

両頬りょうほの紅あかい熱ねつを
誤魔化ごまかすように

「そうそう 腐れ縁くさえんで
長い付き合いながつきあいの
幼なじみおさなのことを
仕方なししかたに
心配しんぱいしてやったのよ！」

あたしはそう言い返かえして
健ちゃんけんと二人ふたりして
声こえを出だして 笑わらった

そして
その笑い声わらこえが
治おさまった瞬間しゅんかん…

「山口やまぐち
…あのさ
オレ
実は俺じつは俺…」

突然とつぜんの
トーンダウンとんたうんと共に
健ちゃんけんの真剣しんけんな
眼差まなざしが
あたしの瞳ひとみを 捉とらえる

「…うん？」

あたしは
そう音おとを発はっするのが
精せい一杯いっぱいのことで
まるで何なにかの魔法まほうに
掛かかったかのように

健けんちゃんのその真剣しんけんな
眼差まなざしを見みつめ続つづけて
次つぎの言葉ことばを
待まって いた

…そして
次つぎの瞬間しゅんかん…

健けんちゃんが
口くちを開ひらこうとしたのと
同どう時じに

「ただいま！」

玄関げんかんから聞きこえてくる
お父とうさんの声こえ…

今度は
掛^かかっていた魔法^{まほう}が
解^とけたかのように
あたしと健^{けん}ちゃんは
二人^{ふたり}して肩^{かた}で
小さ^{ちい}く息^{いき}を吐^はくと
リビングに入^{はい}って来^きた
お父^{とう}さんのことを
見^みつめた

「おかえりなさい」

あたしと健^{けん}ちゃんの声^{こえ}が
シンクロするよう
音^{おと}を出^だす

お父^{とう}さんは
そんなあたしと
健^{けん}ちゃん顔^{かお}を
交^{こう}互^ごに見^みつめると
健^{けん}ちゃんのほうに
目^めをやつて

「おう！健^{けん}ちゃん！
来^きてたのかい？
今日^{きょう}は
大^{たい}変^{へん}だつたらう？

でも心配しんぱいすることは
ないよ
あれは事故じこだからね
しょうがない！」

そう陽気ようきに
健ちゃんけんちゃんに声こえを掛かける

「…はい」

健ちゃんけんちゃんは
それに応おうじるように
返事へんじをしながら頷うなずくと
あたしのほうをみながら

「…じゃあ俺オレ
そろそろ帰かえらないと…」

そう言いって 席せきを立たつ

「…えっ？
あっ…うん…」

あたしは何なんだか
そんな健ちゃんけんちゃんを
引き留ひとどめることが
出来できずに

お父さんとうに
小さく会釈えしやくをして
リビングを出て行くいで
健ちゃんけんの後ろ姿うしろすがたを
その背中せなかを
見つめて いた

健ちゃんけんの
そんな姿すがたを
見つめながら
あたしは不思議ふしぎと
こんなことを
思っおもっていた

あたしは
刑事けいじの娘むすめだけれど
刑事けいじという職業しごくが
あまり好きすじゃない

こんなことを言っいと
お父さんとうには悪いわるけど…
だって
人を疑うたがうことを
仕事しごとにしているだなんて
そんな職業しごく
絶対ぜったいに 嫌イヤ…！

それは絶対に
嫌イヤなんだけれど…

…でも

あたしにも

確実に

そんな刑事けいじの

お父とうさんの

DNAディエヌエーが

組み込まれて
いる…

そして

健けんちゃんがさつき

真剣しんけんな眼差まなざしで

あたしに言いいかけた

伝つたえたかったことを

考かんがえたと…

心こころの中なかに

モヤモヤとした

灰色はいろの雲くもが現あらわれて

それをドンどんと

増幅ぞうぷくさせて
いく…

“…健けんちゃんは

何か重要なことを
あたしに隠して
いる……”

娘のそんな気持ちを
知ってたか
知らずか

お父さんは
背広の上着を脱いで
リビングの椅子の
背もたれに
それを掛けると
ネクタイを緩めながら

「おっ！
カルピスか
外は暑くて堪らんよ！」

そう言っ
て
健ちゃんの飲みかけの
カルピスを
一気にグイッと
飲み干した

6 お葬式の午後に

「健ちゃんは何を隠して
いるんだろう…」

“山口

あのさ…
実は俺…”

あの言葉の後に
健ちゃんがあたしに
伝えたかった言葉は
一体何だったの
だろう…？

そんな釈然としない
気持ちを
抱え込んだまま

健ちゃんが帰った日の
翌日の午後
あたしは自分の部屋の
ベッドの上で
横になりながら
ゴロゴロとしていた

ふと

ベッドの横の

台の上に置いてある

目覚まし時計を見れば

もう午後の14時…

きつと今頃

風間コーチのお葬式が

執り行われて

いるはず…

昨日 喪服姿で

風間コーチの

アパートへ

お手伝いに向かった

お母さんは

そこで

お手伝いをしながら

そのまま

お通夜にも出席し

結構

夜遅くになってから

帰って来た

そして今日もまた

喪服に着替えると

風間^{かざま}コーチの
お葬式^{そうしき}へと
出掛^{でか}けて行^いった

あたしも
行^いったほうが
いいのかと
お母^{かあ}さんに
尋^{たず}ねただけれど

どうやら
水球^{すいきゅう}クラブ内^{ない}での
話^{はな}し合^あいの結^け果^か
卒^{そつ}業^{ぎょう}生^{せい}にも
連^{れん}絡^{らく}網^{もう}が来^きて
現^{げん}リ^りーダ^ーの
男^{おとこ}の子^こが一^{ひとり}人^り
水球^{すいきゅう}クラブの
生^{せい}徒^{たい}代^{だい}表^{ひょう}で
出^{しゅ}席^{せき}するとい^いうこ^ことが
決^きまっただらしく

他^{ほか}の生^{せい}徒^{たち}達^{だれ}は誰^{だれ}も
行^いかなくても
いいとい^いうこ^ことに
な^なったと
お母^{かあ}さん

話^{はな}してくれた

お父^{とう}さんはお父^{とう}さんで
別^{べつ}の事件^{じけん}の仕^し事^{ごと}が
入^{はい}ったらしく
あたし^あが起^おきたとき^{とき}にはもう
家^{うち}にはい^いなかつた

また一人^{ひとり}で
お留守^{るす}番^{ばん}：
お菓子^{かし}でも
食^たべようかな：

ど^どんなに釈^{しゃ}然^{ぜん}とし^しない
気^き持^もちでい^いても
やっぱり そ^そこは
中^{ちゅう}一^{いつ}の女^{おんな}の子^こ
スィーツに
勝^{まさ}るもの^{もの}なん^んて：
多^た分^{ぶん} ない

：：確^{たし}か
冷^{れい}蔵^{そう}庫^この中^{なか}に
取^とっ^て置^おきのプ^ぷリン^{りん}が
1^こ個^こだけ
あ^あっ^たは^はず^ず：

あたしは少し
ウキウキしながら
ベッドから
飛び起きると
二階の自分の部屋から
階下のリビングへと
向かう

…そのとき

“ピンポーン”

玄関のチャイムが鳴る

階段を
降りかけていた
あたしは

「はーい」

と返事をしながら
急いで階段を降りて
玄関へと向かい

鍵を開けると

ゆつくりと
扉^{ドア}を
開^{ひら}いた

7・来訪者

玄関の扉を
開いた先に
待っていたのは…

「久しぶり
連絡もしないで
いきなり来ちゃって
ごめん
どう？夏休み
満喫してる？」

おなじ中の同学年で
元人魚水球クラブの
仲間の内の一人
桂木修平くん だった

「桂木くん！？
久しぶり！
どうしたの？
まあ 入って」

あたしは少し
驚きながらも
桂木くんを
招き入れながら

そう言う

桂木^{かつらぎ}くんは

「じゃあ…
お邪魔^{じゃま}します」

そう言^いいながら
靴^{くつ}を脱^ぬいで
それをしつかりと
揃^{そろ}えると

「風間^{かざま}コーチのこと…
連絡網^{れんらくもつ}が来^きて…」

声^{こえ}のトーンが
暗^{くら}くなる

「…うん
突然^{とつぜん}のことで
びつくりしたよね…」

そう言^いいながら
二人^{ふたり}一緒^{いっしょ}に
リビングへと向^むかうと

あたしは桂木^{かつらぎ}くん
に
椅子^{いす}を勧^{すす}め

自分^{じぶん}は
飲^のみ物^{もの}を入^いれるために
キッチンへと向^むかう

「オレンジジュースで
いい？」

あたしがリビングの
桂木^{かつらぎ}くん
に
声^{こえ}を掛^かけると

「あ……
お構^{かま}いなく」

そんな桂木^{かつらぎ}くんの声^{こえ}が
返^{かえ}ってくる

他^{ほか}の飲^のみ物^{もの}を
氷^{こおり}入^いりで頼^{たの}む
誰^{だれ}かさんとは
大違^{おおちが}い過^すぎる……

あたしはお盆^{ぼん}に
オレンジジュースの
コップを
二^{ふた}つ載^のせると

リビングへと向^むかう

「はい どうぞ」

オレンジジュースを
桂^{かつらぎ}木^きくんの前^{まえ}に置^おく

「ありがとう
いただきます」

桂^{かつらぎ}木^きくんはそう言^いって
微笑^{ほほえ}むと

オレンジジュースを
一口^{ひとくち}飲^のんだ

「中学校^{ちゅうがっこう}のほうは
どう？」

あたしが
桂^{かつらぎ}木^きくんの
正面^{しょうめん}の椅子^{いす}に
腰^{こし}掛^かけながら
尋^{たず}ねると

「うん…
まあ…普通^{ふつう}…かな？
でも正直^{しょうじき}言^いうと

健太や美心ちゃんと
一緒に中学校が
良かったかなあ…
って」

桂木くんは
そう言っただけから
また微笑む

ほんわりとした
雰囲気
誰にでも優しい
誰からも好かれる
桂木くんは
小学校は
あたしと健ちゃんと
同じだったのだけれど

中学校からは
私立の
お坊ちゃま学校の
受験に合格して
あたしと健ちゃんとは
別の学校へと
通っていた

「会っなのは

小学校を
卒業して以来
かもね」

あたしがそう言うとい

「うん…
本当にごめん
突然来ちゃって
でもどうしても
風間コーチのことが
気になったから…
美心ちゃんの
お父さんは確か
刑事さんだったと
おもって
何か知ってるのか
なあ…って」

桂木くんは
申し訳なさそうに
言う

「ううん
全然大丈夫！
あたしは夏休みで
ゴロゴロしてた
だけだし

ひとり
一人きりで
お留守番るすばんで
丁度ちやうど話し相手はなあいても
欲ほしかったところ
だし！」

せつかく
来てくれたのに
申し訳わけなさそうに
している
桂木かつらぎくんを見て
何なんだかあたしのほうが
申し訳わけなくなってきた
必死ひっしになつて
そう言いながら
あたしは続ける

「あたしも
そんなに詳しくは
ないんだけど
桂木かつらぎくん
ほら覚えてる？
プールに
慣なれるために
たまにみんなで
やった
タイル取りゲームとの
こと」

「あつ…うん
プールの底にある
色付きのタイルを
潜って取って来る
ゲームだよね？」

「そうそう
どうやら
風間コーチは
そのゲームを
している最中に
溺れて
亡くなったそうよ
お父さんは
事故死だ…って」

「そう…なんだ…」

桂木くんは
あたしの話を
何か考え込むように
聞いていると

「健太も
その場にいたの？」

次の瞬間
そう言った

「…えっ？
あっ…うん」

あたしは頷きながら

「健ちゃんけんは
小学校をしょうがっこう
卒業した後もそつぎょう
コーチ補助ほしよみたいな
感じでかん
水球クラブをすいきゆう
手伝いに行っていた
から…」

そう応えとこた

「そっか…」

桂木くんはかつらぎ
思い詰めたようにおも
頷くとうなず

「自業自得…なんだ…」

健太^{けんた}に
感謝^{かんしゃ}しなきゃ
…」

そう 呟^{つぶや}いた

「…えっ？」

あたしが驚^{おどろ}いて
思^{おも}わ^{こえ}ず声^{こえ}を出^だすと

桂木^{かつらぎ}くんは
いつも^いの^つ優^{やさ}しい
雰^{ふん}囲^{いき}気^きに^{もど}戻^{もど}って

「ううん…
何^{なん}でも ない」

そう言^いって
微笑^{ほほえ}んだ

8・懇願

“ 自業自得じごうじとくって

どういうこと？

健けんちゃんに感謝かんしゃって
一体いったい何を？ ”

あたしがそう

口くちを開ひらこうとしたとき

「それにしても

美心みこちゃん

雰囲気ふんいき 変かわったね

水球すいきゆうクラブに

いたときには

ショートカットで

まるで男おとこの子こみたい

だったのに

ちゅーちゅー

中な一いちになっただ今いまでは

髪かみも

肩かたまで伸のばして

ちゃんと

女おんなの子こしてるよ」

かつらぎ

桂木かつらぎくんがそう言いって

微笑ほほえむ

「そつ そつかな…」

あたしは少し

照れながら
頭を掻く

確かにあたしは

小学生のときには
髪も短くて

ボーイッシュだった

…まあ
外見だけじゃなくて…

悪ふざけをする

健ちゃんを

追い回したり

取っ捕まえて

制裁を加えたり

一緒になつて

泥んこ遊びをしたり

木に登つて

遠くの景色を

眺めたり…

ある意味 いみ 本当 ほんとう に
男の子 おこ っぽかったの
だけだ...

中 ちゅう 一 いつ になっ な た今 いま は
ちゃんと自分 じぶん を
自覚 じかく ？ して
一応 いちおう ？ は
女の子 おんなこ っぽくしてる？
から
問題 もんだい はない... はず...

？ マークが
多 おほ くなるのが
ちょっと引 ひ っ掛 か かる
けれど...

... うん！

“ 終 お わり良 よ ければ
すべて良 よ し ”

よ！

... あれ？

何だか使い方が
間違っているような…

…でも

気にしない…
うん！ 気にしない！

あたしがそう一人
変な風に
納得をしていると

「美心ちゃんは
風間コーチが
亡くなって
…どう思った？」

ふいに
優しい微笑みの消えた
桂木くんが
真剣な表情で
聞いてきた

「…うん？」

桂木くんの
あまりに真剣な表情に

一瞬^{いつしゆん} 返答^{へんとつ}に困^{こま}った
あたしだけど

それでも
口^{くち}を開^{ひら}けば

「何^{なん}だか
変^{へん}な感^{かん}じ…かな
知^しつてる人^{ひと}が
この世^よから
いなくなる…
っというか
もう会^あえないん
だな…って…
でも正^{しょう}直^{ぢき}
まだ信^{しん}じられない
感^{かん}じで
現^{げん}実^{じつ}味^みがなくて…」

あたしがそう応^{こた}えると

桂^{かつらぎ}木^きくんは
真^{しん}剣^{けん}な表^か情^おのまま
その言^{こと}葉^はを聞^きいていて
そして ふと

「
…僕は^{ぼく}

気持ちきもちが

すっきりした

感じかんじ…かな？

…過去の呪縛かこじゆばくから
解放はなされた

みたいに…

心こころが自由じゆうに

なったような…」

そう 呟つぶやいた

「…えっ？」

あたしが驚おどろいて

そんな桂木かつぎくんを
見みつめると

桂木かつぎくんは

見みたこともないような

寂さびしそうな顔かおで

微笑ほほえんだ

…桂木かつぎくんは

あたしに

何かなにを伝つたえようと

している…？

さっきの言葉…
ことば

そして
いま
今の言葉…
ことば

きつとそれは
かざま
風間コーチの死に
かんけい
関係していることで
とても言い難い…こと
にく

…そして

そのことに
けん
健ちゃんも関わって
かか
いるかもしれない
ということ…

このまま何も
なに
聞かないほうが…
き

…心が
こころ
ざわつき始める…
はじ

…それでも
あたしは知りたい
し
知らなくてはいけない

そんな気がする

このままここで
口を閉ざして
しまつたら
目を瞑つて
しまつたら
いけないような
気がする
後で後悔するような
気がする…

そんなのは絶対に
嫌だ

あたしは心を決めて
小さく息を吸い込むと

「ねえ…桂木くん
あたしに
話したいことが
あるのなら
話してみて
あたし絶対に
誰にも言わない
もちろん
お父さんにも

もし今回の
風間コーチのことが
事故死じゃなくても

もしそのことに
誰かが…
…健康ちゃんが
関わっていたと
しても
絶対に
誰にも
言わないから…

ただ…
どんなに
辛いことでも
本当のことが
知りたいの

そう一気に言って
桂木くんを
真っ直ぐに見つめた

9・告白

“どんなに
辛いことも
本当のことが
知りたい”

あたしはその想いを
真っ直ぐに桂木くん
ぶつけた

桂木くんは
そんなあたしから
目を逸らすと

「いや
僕は別に…」

そう歯切れ悪く
応える

でも
心を決めたあたしは
ただ
そんな桂木くんを
見つめ

次の言葉を
待つことしか
出来なかった

...

.....

.....

沈黙の時間が
流れる

あたしには
その時間が
もの凄く長く
感じられたのだけれど
きつと5分も
経っていなかったと
思う

「
...独り言」

目を逸らしたまま
桂木くんがふいに
そう言葉を発した

「
今から
僕が言うことは

全部^{ぜんぶ}…
独り言^{ひとりご}だから…」

あたしは
何も^{なに}言^いわずに
小さく^{ちい}頷^{うなず}いた

桂木^{かつらぎ}くんは
心^{こころ}を決^きめたように
小さく^{ちい}息^{いき}を吐^はき出^だすと
ポツリポツリと
話^{はな}し始^{はじ}めた

「あれが…
あれが始^{はじ}まったのは
マーメイド^{マーメイド}水球^{いきゅう}クラブに
入^{はい}って
半年^{はんとし}くらい
経^たった頃^{ころ}のこと
だっ^たたと思う^{おも}う…
丁度^{ちやうど}
今^{いま}みたい^な
夏休^{なつやす}みに入^{はい}ってから
すぐ^{すぐ}くらの頃^{ころ}
そう…小五^{しょうご}の…
夏休^{なつやす}み…

ほら 覚えてる？
クラブが終わった
後の
器具の後片付け
風間コーチと
生徒の一人がいつも
それをしていた
こと…

そして
その後片付け役の
生徒の一人を
いつも風間コーチが
名指しで
決めていたという
こと…」

桂木くんは
あたしから
目を逸らしたまま
まるで思い出すように
遠くを見つめながら
続ける

「器具の
後片付けにしては
倉庫の中にある

時間^{じかん}が
少し^{すこ}長^{なが}かつたよね…
しかも
後片^{あとかたづ}付けをしない
生徒^{せいと}達は
さつさと更衣室^{こういしつ}に
向^むかわさせられて…

プールの横^{よこ}の
倉庫^{そうこ}の中^{なか}に残^{のこ}るのは
いつも
風間^{かざま}コーチと
後片^{あとかたづ}付けをする
ように
名指^{なささ}しされた
生徒^{せいと}の一人^{ひとり}だけ…」

ハツとして
あたしは桂木^{かつらぎ}くんを
見^みつめ直^{なお}した

「…そうだよ
まるで生贄^{いけにえ}みたいさ
僕^{ぼく}達は毎週^{まいしゅう}毎週^{まいしゅう}
代^かわる代^がわる
あの倉庫^{そうこ}の中^{なか}で
風間^{かざま}コーチから

「ご丁寧^{ていねい}に
ご指名^{しめい}を受けて
悪戯^{いたずら}されて
いたんだよ…」

「おどろ
驚くほど冷静^{れいせい}に
桂木^{かつらぎ}くんは
そう言い切^{いき}ると
淀^{よど}みなく真^まっ直^すぐに
あたしを 見^みた

「そ…
そんなことって…」

「動揺^{どうごう}しながら
やっと発^{はっ}した
あたしの言葉^{ことば}を
遮^{さへぎ}るように

「そんなこと
あり得^えないって？」

「つぎ しゅかん
次の瞬間^{かつかん}
桂木^{かつらぎ}くんは自嘲^{じちやう}気味^{きみ}に
鼻^{はな}で笑^{わら}うと

「美心^{みこ}ちゃんが
マーメイド^{マーメイド}クラブに

入れたのは
外見が可愛い
男の子みたいだった
からさ
本来は
少年専用の
水球クラブ
だったからね」

「でも…あたし…」

「そうだよね」

やはりあたしの
言葉を遮るように
桂木くんは頷きながら
そう言うと 続ける

「美心ちゃんは一度も
後片付けを
していない
美心ちゃんが
名指しされるたびに
健太が何かに理由を
つけて
代わってやって
いたからね…
美心は今日

体調たいちようが悪いから
俺おれが代かわりに
後片付けあとかたづやります
と

『みくちゃんきょうは今日けふ
早く帰かえらないと
いけないから
俺おれが代かわりに
後片付けあとかたづやります
』
とかね…」

…健ちゃんけんが
身代わりみがとして
あたしのことを
守まもってくれて
いた？

…健ちゃんけん
そうだったの？
…健ちゃんけん
本当に？

どうしてだろう…
変へんなの
こんなときくらい
爽やかな笑顔えがの

健ちゃんけんちゃんの顔かおを
思い出おもしたいのに
浮うかんでくるのは
不貞腐ふてくされた顔かおや
そっぽを向むいてる
ときの
健ちゃんけんちゃんばかり…

あたしは
居いた堪たまれなくなつて
声こゑを絞しほり出だすように

「…ねえ どうして？
どうして誰だれにも…
言いわなかったの…？」

そう桂木かつらぎくん
問とい掛かけた

桂木かつらぎくんは
そんなあたしの問といに
小ちいさく首くびを振ふると

「…言いいたくても
言いえなかつたんだよ
風間かざまコーチは
あの倉庫そうこの中なかに
隠かくしカメラを

仕掛^{しか}けていて
その行^{こう}為^いの
一^{いち}部^ぶ始^し終^{しゅう}を
記^き録^{ろく}していたから…

それに
風間^{かざま}コーチは
他^{ほか}のコーチや
保^ほ護^ご者^{しゃ}からも
とて^{にん}も人^き気^きがあつて
信^{しん}頼^{らい}もされていた
からね…
誰^{だれ}もそんなことを
疑^{うたが}うことすら
しなかったよね…

…だから
だから僕^{ぼく}達^{たち}は
我^が慢^{まん}するしか…
なかったんだ…」

…どう言^{こと}葉^はをかけて
いいのか…

そして
あたしの身^み代^がわりに

なっ
てく
れて
いた
健けん
ちゃん
のこ
とを
思おも
うと

あ
たし
はど
うす
れば
い
い
の
か

…
分わ
か
ら
な
い

そ
ん
な
あ
た
し
を
見み
つ
め
な
が
ら
桂
木
く
ん
は

「
…
本
当
は
ず
つ
と

誰だれ
か
に
話はな
し
た
か
つ
た
ん
だ
…
す
べ
て
を
話はな
す
こ
と
で
少
し

楽らく
に
な
れ
る
よ
う
な
気き
が
し
て
…

そ
う
簡
単
に
全
部
が
終
わ
つ
た
こ
と

と
は
割わ
り
切
れ
な
い
け
ど
…

健
太
が
ず
つ
と

言^いつてくれて

いたから…

『いつかみんなで

あいつを地獄^{じごく}に

突き落^おとして

やろうぜ』

…
つて

『潜^{もぐ}っているときに

みんなで抑^{おさ}え

込^こめば

あいつの息^{いき}の根^ねを

止^とめられるから』

…
つて

そのことを

考^{かんが}えるだけで

いろい^{いろ}ろと頑^{がん}張^ばれた…

その日^ひが来^くるのを

楽^{たの}しみに

待^まつことが

出来^{でき}たから…

それなのに僕^{ぼく}は

そんな大^{だい}事^じな日^ひに

健^{けん}太^た達^{たち}と一^{いっ}緒^{しょ}にいる

ことが

出来^{でき}なかつた…

一^{ひとり}人^にだけ

健太達を
裏切ったんだ…」

そう言っ
て俯いた

「桂木くん…」

今のあたしには
名前を呼ぶことが
精一杯だった…

「美心ちゃん
刑事である
お父さんに話す？

健太に
僕達全員に
風間コーチを殺す
動機があったという
ことを…

そしてそれを
水球クラブの
OBとして
コーチ補助として
実行することが
出来た
ということも…」

あたしは小さく
首を振ってから

「心配しないで
約束したもの
勇気を出して
話してくれて
本当に
ありがとう」

そう言ってから
無理に
微笑んで見せた

10・プリンと彼女

桂木くんが帰った後
あたしは
当初の目的通り
冷蔵庫から
取って置き
のプリンを
取り出して

リビングの椅子に
一人座って
それをモクモクと
まるで機械が
何かの作業を
するみたいに
スプーンを
動かしながら
食べていた

小学校五年生
二年間ずっと
人魚水球クラブに
通っていた
あたしのことを
風間コーチから
守ってくれていた

健ちゃん…

そして
あたし以外の
健ちゃんを含めた
男の子達全員が
風間コーチから
受けていた
残酷な事実…

そのことを思うと
胸の辺りが痛くなる
…ううん
張り裂けそうに
なる

それでも…
風間コーチの
日に焼けた
爽やかな笑顔を
思い浮かべる度に
どこかでそのことを
信じ切れない
あたしもいる

でも…
桂木くんは

嘘うそを付つくような
人間ひとじゃない
仮かりに
嘘うそだったとしても
こんなことを話はなして
一体いったい誰だれの
得とくになるのだろう…

“…言いいたくても
言いえなかつたんだよ
風間かざまコーチは
あの倉庫そうこの中なかに
隠かくしカメラを
仕掛しかけていて
その行こう為いの
一部いちぶ始し終しゅうを
記き録ろくしていた
から…”

ふいに
桂木かつらぎくんの言葉ことばが
頭あたまの片隅かたすみに
甦よみがえる

“行こう為いの一部いちぶ始し終しゅうを
記き録ろく…?”

…じゃあ
その記録きろくしていた
モノは
今いまどこにあるの？

プリンをすくっていた
スプーンの動きうごが
あたしの手てが…
止とまる

そして突然とつぜん
ある人ひとの言葉ことばが
脳裏のうりに
浮かび上あがって来くる…

“美心みこちゃんとは
たった二人ふたりの
女おんなの子同士こどうしだもの
仲良なかよくしようね”

…どうして今いま
三枝さえぐさコーチのことを
思い出おもす…の？

“男おとこの子達こたちには内緒ないしょね

実は私^{じつ わたし}
風間^{かざま}コーチと
付き合^あってるの”

あたしはハツとして

…どうして今^{いま}まで
思^{おも}い出^ださなかったの
だろう

…そうだ
風間^{かざま}コーチの彼女^{かのじょ}の
三枝^{さえぐさ}コーチなら
もつと色々^{いろいろ}なことを
その…
記録^{きろく}したモノの
こと^{ふく}も含^{ふく}めて
何^{なに}か知^しっているかも
しれない

…でも
この二^{ふた}年^に間^{ねん}で
二人^{ふたり}が別^{わか}れている
可^か能^{のう}性^{せい}は？

それでも…

ここでもうして

何もしないで

悩んでいるよりは

全然いい

あたしは

容器の片隅に

残っているプリン

欠片を

スプーンも使わずに

口の中に

放り込むと

急いで

自分の部屋へと向かい

机の引き出しの中から

人魚水球クラブの

メンバー住所録一覧を

取り出す

「あつた！」

あたしは

そう口に出して

その中から

三枝コーチの住所を

確認かくにんすると
メモに書き移うつし

そのメモを握にぎりしめ
手短てみじかに
外出がいしゅつの準備じゅんびを
済すませると
家いえから 飛とび出だした

11・マンションの前で

“○○町3丁目

108番地

グランドハイツ

ホワイト

202号”

掌^{てのひらにぎ}に握りしめた

三枝^{さんぐさ}コーチの

住所^{じゅうしょ}が書^かかれている

メモを

ポケットに

しまい込^こむと

あたしは目^めの前^{まえ}に

そびえ立^たつ

その名^{なまえ}前^{とあ}の通^{とお}り

真^まっ白^{しろ}な

マンションを

見^み上げていた

あたしの家^{うち}から

数^{すうじゅうぶん}十分^{きゅうりん}の距^{きょり}離^り

案^{あんがい}外^{ちが} 近^{ちか}かつたんだ…

あたしは掌てのひらで
軽く両頬りょうほほを
ピシャツと叩たたくと

「よし！」

そう声こえに出だしてから
三枝さえぐさコーチの住すむ
マンションの中なかへと
一歩いっぽを踏ふみ出だした

自動扉じどうドアが開ひらいて
もう一枚いちまいの扉ドアは
オートロック

あたしは近ちかくにあつた
呼び出よだし機きで
三枝さえぐさコーチの
部屋へやのナンバーを
押おすと
応答おうとうを待まった

： どうしてか
分わからないけれど
とても胸むねが
ドキドキする

呼び出し音を
聞きながら
あたしは何故だか
ひだりて
左手で
胸の辺りを
押さえていた

勢いで
うちと
家を飛び出して来た
のは

いいものの
かんが
よくよく考えてみれば
さえぐさ
三枝コーチに
ふう
どういう風に
はな
話していいのか
わ
分からない…

ただでさえ
かれし
彼氏である
かざま
風間コーチの
とっぜん
突然の死を
かな
悲しんで
いるはずなのに…

そこに
かざま
風間コーチの

隠かくされた秘密ひみつを
聞きき込こもうとしている
あたしが いる

…もし
三枝さえぐさコーチが
そのことを
知しらなかつたと
したら…？

ただ単たんに
三枝さえぐさコーチを
傷きずつけることに
なるだけなのでは…？

でも
あたしは…
本当ほんとうのことが
知しりたいんだ…

それでも
そのことに
三枝さえぐさコーチを
巻まき込こんでしまっても
いいものなのだろう
か…？

三枝^{さんぐさ}コーチに
会^あいに来^きたことを
安^{あん}易^いに
呼^よび出^だしボタンを
押^おしてしまったことを

あたし^{すこ}が少^{すこ}し
後^{こう}悔^{かい}し始^{はじ}めた頃^{ころ}…

「…はい
ど^さち^まら様^{さま}…
あ^{みこ}ら！？
美^{みこ}心^こち^こゃん？
美^{みこ}心^こち^こゃん^なの？」

三枝^{さんぐさ}コーチの
明^{あか}る^{こえ}い声^{こえ}が
呼^よび出^だし機^きの
ス^ふピー^{ふん}カーのよう^な
マイ^きク部^ぶ分^{ぶん}から
聞^きこえて 来^きた

あ^みれ…
あ^{すがた}たしの姿^{すがた}
見^みえてるんだ

ふと
よく見れば
呼び出し機には
覗き穴のような
小型のカメラが
付いているのが
分かる

ああ…
それで…
あたしの姿が
見えてるのね
…なんて納得してる
場合じゃなくて…

…でもせっかく
ここまで
来たんだもの…
会って
話していただくでも
いいよね…

そう自分に
言い聞かせてから
あたしは急いで

そのマイク部分ぶぶんに顔かおを
近づちかけると

「こんにちは
お久ひさしぶりです
こんなときに突然とつぜん
すみません」

そう言いって
カメラに向むかって
小さく会釈えしゃくをした

12・再会

「久しぶりね〜！」

あらあら

すっかり

女の子らしくなって

さあ

入って
入って
入って〜」

オートロックの扉を

抜けて

エレベーターを

降りた先

2階の2号室

プレートに

“202”と書かれた

その扉の横の

チャームを

押そうとした瞬間に

三枝コーチは

扉を開いて

2年前と変わらない

優しいその笑顔で

あたしを出迎えて

くれた

「あれ？

三枝

三枝コーチ

その格好……」

喪服姿の

三枝

三枝コーチを

見つめながら

尋ねる

ように

あたしが言っていると

「……うん

こんな格好で

ごめんね」

いま

今丁度

良介の……

あつ……風間コーチの

お葬式から

帰って来たところ

なのよ」

「……うん

“良介”

風間コーチの

下の名前だ

そっか：
知らなかったけど
三枝コーチは普段
風間コーチのことを
“良介”って
呼んでたんだ：

一瞬
変なことに
感心している あたし

「さあ
ともかく
入って入って」

玄関先にいたあたしを
再び促すように
三枝コーチは言う

「失礼します」

あたしは
そう言って
靴を脱ぐと
それを揃えてから
部屋の中
お邪魔する

：白^{しろ}を基調^{きちょう}とした
可愛^{かわい}くて
清潔感^{せいけつかん}のあるお部屋^{へや}

マンションの名前^{なまえ}も
ホワイトだったし
三枝^{さえぐさ}コーチつて
白色^{しろいろ}が好^すきなのかな？

あたしは勧^{すす}められた
白^{しろ}くて丸^{まる}い
ビーズクッションに
腰掛^{こしか}けながら
そんな部屋^{へや}の中^{なか}を
キヨロキヨロと
見回^{みまわ}して いた

三枝^{さえぐさ}コーチは
喪服^{もふく}姿^{すがた}のまま
キッチンで
ゴソゴソと
何^{なに}かをしていたかと
思^{おも}うと

白いお盆しろい ぼんに
クッキーと
アイステイーを載のせて
あたしのところまで
やって来きた

「外そとは暑あつかったで
しょう？
水分補給すいぶん ほきゅうと
エネルギー補給ほきゅうを
してね」

そう言いって
クッキーと
アイステイーを
あたしに差さし出だす

何なんとなく
その言いい方かたが
スポーツ選手せんしゅらしくて
あたしはクスツと
笑わらってしまふ

「あら？ 私わたし
何かおかしなこなにと
言いった？」

三枝コーチは
少し首を傾げながら
あたしを見つめる

あたしは慌てて

「あつ…いえ

何だか

三枝コーチ

昔と変わって

ないなあ…

って思ったら

つい嬉しく

なっちゃって…」

そんなあたしの言葉に
三枝コーチは一瞬
考え込むように
腕を組みながら

「まあ…

私はね…

でも美心ちゃんは

水球を

教えていた頃は

とても

男の子っぽかった

けど
今はとても
女の子っぽく
なったわよ

…私 わたし びっくり
しちゃって…

でも まあ…
私の大人わたし おとなの魅力には
まだまだ遠く
及ばないけどね

そう悪戯いたづらっぽく言う

あたしはすかさず

「でもあたし
シャワーの水
まだ肌が
弾き返しますけど…」

そう言う

「な…何ですって…
シャワーの水を…
肌が…弾き…
返すですって！」

私^{わたし}なんて
吸^すい込^こむばかり
なの^のに^に？[？]」

と三枝^{さえぐさ}コーチが
言^いい返^{かえ}す

…そして
一瞬^{いつしゅん}の間^まがあつてから
二^{ふた}人^りして
声^{こえ}を出^だして 笑^{わら}った

あたしは三枝^{さえぐさ}コーチと
一^{いっしょ}緒^{わら}に笑^{わら}いながら
気^き持^もちが
ホッとして^{かん}いるのを
感^{かん}じていた

勢^{いきお}いだけで
三枝^{さえぐさ}コーチの
マンシヨ^きンへ
や^きつて来^きてしま^きった
けれど

このま^まま
こ^こうや^やつて

楽しい会話だけをして
帰ったって
別にいい

“…本当のことが
知りたい…”

弱気になった心から
強い気持ち
消えそうになつて
笑う三枝コーチを
見つめながら

あたしは
そんなことを
考えていた

13・訪問理由

…そう

このまま

三枝さんぐさコーチと

楽しくたの会話かいわをして

家にうち帰かえったら いい…

これ以上いじょう

あたしが

首くびを突つ込こむことじゃ

ないし…

風間かざまコーチは

事故じこ死しだと

刑事けいじであるお父とうさんが

警察けいさつが

判断はんだんしたことなんだ

し…

すいきゅう

水球すいきゅうクラブの

男おとこの子達こたちを

撮影さつえい記録きろくした

モノだつて

本当ほんとうにあるのかどうか

分わからないんだし…

「もしそれが
本当にあつたとしても
このまま
見つからなければ
もう何も
問題はないことなんだ
し」

「何だか
自分に言い訳を
してるみたい」

あたしはフツと
笑うのをやめて
そんなことを
少し俯いて
考えていた

「美心ちゃん？
どうしたの？
突然 真顔になつて」

顔を上げれば
そこには

心配しんぱいそうな
三枝さえぐさコーチの顔かお…

「あつ…いえ
すみません
ちよつと考かんがえ事ことを
しちやつて…」

あたしがそう応こたえると
三枝さえぐさコーチは
優やさしく微笑ほほえみながら

「ひよつとして
健太けんたくんのこと？」

そう言いう

「えっ？
いえ 全然ぜんぜん違います
何なんであんなのこと
なんか！」

顔かおが火照ほてるが
自分じぶんでも分わかる

三枝さえぐさコーチは
テレビのクイズ番組ばんぐみに
正解せいかいしたような
顔かおつきになって

「そうだと思おもった
のよー！
…で 付き合あって
るの？」

そう言いいながら
キラキラとした瞳ひとみで
あたしを見みつめる

三枝さえぐさコーチ…
ひと 話は
全然ぜんぜん
聞きいて ない…

あたしは思おもわず

「違ちがいます！
健けんちゃんぜんぜんは全然
関係かんけいなくて…
うつん…
関係かんけいないことも
ないけれど…

風間^{かざま}コーチのことで

…そう！

風間^{かざま}コーチのことで

三枝^{さえぐさ}コーチに

聞^ききたいことが

あつて

それで…

それでここに

来^きたんです！」

おおこえ
大声^{おおこえ}で

そう言^いってしまつて

から

あたしはハツとして

三枝^{さえぐさ}コーチの顔^{かお}を

見^みつめ直^{なお}した

三枝^{さえぐさ}コーチは

そんなあたしの目^めを

真^まっ直^すぐに

見^みつめ返^{かえ}しながら

「…そう

ここに来^きた理^り由^{ゆう}は

そういうことだつた

の
」

そう言^いつて
何^{なん}ともいえない顔^{かお}で
微笑^{ほほえ}んだ

「いえ…その…
風間^{かざま}コーチのことで
彼女^{かのじょ}である
三枝^{さえぐさ}コーチなら
何^{なに}か知^しっているかな
…と思^{おも}つて…」

あたしは
しどろもどろに
なりながら
そう応^{こた}える

「別^{べつ}にいいのよ！
本当^{ほんとう}のことを言^いつて
くれたほう^うが
私^{わたし}も嬉^{うれ}しい」

そう言^いいながら
三枝^{さえぐさ}コーチは微笑^{ほほえ}むと
続^{つづ}ける

「美心ちゃんみこが
水球クラブすいきめうを
卒業そつぎようしてから
ずっと会あって
いなかったから…

突然とつぜん 訪ねて
来たからには
今回の良介りょうすけの
あつ…風間かざまコーチの
事故死じこしのことと
何か関係なんけいがあるの
かもしれないとは
おもっていたから
ぜんぜんだいしようぶ
全然大丈夫よ

…で 何がなに
聞きたいのかしら？
私わたしで応えられる
ことなら
いいのだけれど…」

そう言いって
三枝さえぐさコーチは
やっぱり微笑ほほえむ

… ちょっと難しい

… ううん
かなり難しい

… 何を

… どういう風に聞けば
いいんだろう…

あたしは
いつの間にか

あのときの…

何も考えずに

家を飛び出して来て

しまったあのときの

気持ちに戻って

… そう

“ 本当のことが
知りたい ”

そんな気持ちに
戻って

… 素直に
聞くしかない…

正直にしんじつに

あたしの
聞ききたいことを…

例たとえそれが

三枝さんえきコーチを

傷きずつけたとしても…

あたしはそう

心こころに決きめて

小ちいさく息いきを吸すい込こむと

静しずかに口くちを開ひらいた

14・後片付けの記録

「
…後片付けの
…こと…です」

あたしがそう
くち ひら しゅかん
口を開いた瞬間に
さんぐさ
三枝コーチの微笑みは
だれ み
誰が見ても
わ
分かるほどに
こわば
強張った

…チク
…タク
…チク
…タク

どこかに置いて
あるのだろうか？
みょう おお
妙に大きく
とけい はり おと
時計の針の音だけが
ふたり あいだ
二人の間に
なが
流れる…

…三枝コーチ
し
知ってたんだ…

…後片付け
あとかたづ

そして…
そうこなか

倉庫の中で
おこな

行われていたことを…

何となく
なん

時計の針の音を
とけいはりおと

数えながら
かそ

あたしはじつと
さえくさ

三枝コーチが
くちひら

口を開くのを
ま

待っていた
いた

そして

時計の
とけい

針の音の数が
はりおとかず

六十を超えた
ろくじゅうこ

丁度そのとき
ちやうど

フウツと

小さく
ちい

息を吐き出す音がして
いきはだおと

三枝コーチは
さえくさ

あたしから
目を逸らすと

ベランダへと続く
ガラス張りの扉から
外の景色を眺めながら
言葉を紡ぎ始めた

「私と良介はね
幼なじみだったのよ
小学校 中学校
高校」

そして…
大学までも
ずっと一緒に
腐れ縁なのかしらね

水球もね
私は特別
興味があつた訳じゃ
なかったんだけど
良介がするって
言うから
ただ単に
ついて行っただけ…」

三枝さんぐさコーチは
そうい言いつて
立たち上あがると
部屋へやの隅すみにある
クローゼットへと
向むかう

そしてそこで
何なにかを探さがしながら
続つづける

「そんな良介じょうけに
あんな性癖せいへきが
あつただなんてね…
人魚水球マーメイドきゅうクラブで
コーチを引ひき受うける
まで
全然ぜんぜん
気きがつかなかったわ

…どうりでずつと
彼女かのじょと言いつても
幼なじみおとなを
卒業出来そつぎょうできずに
友達ともだち以上いじょう
恋人こいびと未満みまんのままな
関係かんけいな訳わけよね」

三枝^{さえぐさ}コーチは
クローゼット^{なか}の中から
白色^{しろいろ}の
大きなエコバック^{おお}を
取り出す^とと

それをあたしの前^{まえ}に
持^もって来^きて
ドサツ^おと置く

「^き気がついたのは
水球^{すいきゆう}クラブで
コーチ^{はじ}をし始めて
1年^{ねん}後^ごくらいだった
かしら
良介^{りょうすけ}の部屋^{へや}で
良介^{りょうすけ}の
ノートパソコンを
触^{さわ}っているときに
偶然^{ぐうぜん}ファイル^みを
見つけたのよ…」

エコバック^{なか}の中から
小さなビデオカメラ^{ちい}を
一^{ひと}つ取り出^だして

三枝さんぐさコーチは
やはりあたしの前まえに
それを置きながら言いう

「もちろん
誰だれにも開ひらけない

ように
暗号あんごう付きには

なっていたけれど
そこは名なばかりの
彼女かのじょでも

ずっと一緒いっしょにいた

幼おさななじみなんだもの

良介りょうすけが思おもいつく

暗号あんごうなんて

すぐに分わかったわ」

三枝さんぐさコーチが
そう言いい終おわって

エコバックを
逆さかさにして振ふると

「その中なかから
もの凄すごい数かずの
USBメモこーえすびーリが
絨毯じゅうたんの敷しいてある
床ゆかの上に」

あふ
あたしの目の前に
で
溢れ出て来た……

15・真相

やまづ
山積みになった

ユースビー

USBメモリと

ちい

小さな

ひと

ビデオカメラ一つを

まえ
前にして

あたしは

ほうぜん
ただただ呆然と

それらを

みつめ続けて いた

きろく
…こんなにたくさんの
記録…

ひと
この一つ一つの

ユースビー

なか
USBメモリの中に

マイマイすいきゅう

人魚水球クラブの

おとし

こたちぜんいん
男の子達全員の…

かつらぎ

桂木くんの

けん

健ちゃんの

くる

かな
苦しみと悲しみと

にく
憎しみが

収められて いる…

あたしは
やり切れない
想いと共に…

「…そんな中
妙に
落ち着き払った声で
淡々と
一人話し続ける
三枝コーチの声を
黙って
聴いて いた

「…それでね
良介が死んだ日の夜
この記録したモノを
ビデオカメラを
良介の部屋から全部
持って来たのよ
もちろん

ノートパソコンの
中身も全部
削除しておいたわ

どうして

そんなことを

したのか…

と言うとね…」

三枝さえぐさコーチは

ここで一度

言葉を切きってから

「…私わたしも

マーメイドマーメイドクラブの

人魚水球せいとたちせんいんクラブの

生徒達せいとたち全員と

ある意味いみ

同罪どうざいだから…なのよ」

そう淀よどみなく

澄すんだ声こえで

はつきりと言いった

あたしはその言葉ことばに

ハッとして

三枝さえぐさコーチを

驚おどろきながら見みつめると

三枝さえぐさコーチは

寂さびしげに微笑ほほえんで

「昨日きのうのことなのに…

もうずっと

昔むかしのことみたい…

徳川とくがわコーチは丁度ちょうど

お休みやすみで…

私わたしと良介りょうけと

健太けんたくんと

数人すうにんのOBオービー達たちが

生徒せいとの指導しどうに

あたっていたのよ…

そのうち健太けんたくんが

『タイル拾いひろゲーム

やりましょう

ただの個人戦こじんせんじゃ

つまらないから

風間かざまコーチ

VSたい

生徒全員せいとぜんいんで

どうすつか？』

なんて言い出して…

…地味じみに

タイル拾いひろゲームは

盛り上もあがるわよね

今考いまかんがえれば

良介りょうけもバカよね…

『よし！
受けて立つてやる
ぞ〜！』

なんて言いながら
爽やかに
笑ってたわ…」

そう言って
三枝コーチは
あたしから
視線を外すと

まるでその瞬間を
思い出すかのように
どこか空を
遠くを見つめながら
続ける

「私は審判役で…
…プールの中に
ばら撒かれた
色付きの
タイルを見て
張り切る良介と
どこか対照的な
生徒達に向かつて
スタートの合図の

笛を吹いたのよ…

もちろん
一番最初に
飛び込んだのは
良介だったわ…」

甲高く響く
笛の音

そしてプールに次々と
飛び込んで行く
水しぶきの音…

あたしにも
その瞬間が
見えてくるようだ…

「おかしいな…
と思ったのは
生徒達全員が
笛の音から
ワンテンポ遅れて
みんなだ
目配せをしながら
先に潜っている
良介の上に

覆い被さるように
順番に
潜って行ったこと…

…そして
一番最初に
水面から浮かび
上がって来た
健太の顔を
…その瞳を
見た瞬間…

三枝コーチは
その瞬間の
健ちゃんの瞳を
思い出したのだろうか？
…2、3秒
目を閉じて
そして再びゆっくりと
開いた

…風間コーチを
プールの底で
生徒全員で
覆い被さるように
抑えつけて…

いくら大人の
水球選手でも
真っ直ぐ水平に
潜っているところを
十人前後の子供達に
覆い被さられるように
抑えつけられたり
したら…

そしてそれを
先頭に立って
行ったのが…
健ちゃん…

だから健ちゃんが
一番最初に
プールから顔を
出した…

…健ちゃん
どんな気持ちだったの？
一体…どんな…？

あたしのその疑問に
まるで応えるように

「とても
満足そうなの……」

「そう
何とも言えない……
今まで見たことも
ないような顔で
微笑んだの……よ」

まるで大きな何かを
成し遂げた後
みたいに……
そして……
不審そうに
見つめている私に
気がついて
目と目が合うと……

もう一度
ゆっくり
同じ顔で
瞳で
微笑んだ……の」

三枝コーチは
静かにそう言ってから

「でも私^{わたし}…

思^{おも}ったのよ

りよ^{りよ}すけ

良介^{りょうけ}は

みずか

自^じらの業^{ごう}から

逃^{のが}れ切^きれずに

マーメイド^{マーメイド}たち

人魚^{マーメイド}達^{たち}から

ふくしゅう

復讐^{ふくしゅう}をされて

そして永^{えい}遠^{えん}に…」

三枝^{さえぐさ}コーチは

いっしゅん

こ^{こと}こ^こで一瞬^{いっしゅん}

言^{こと}葉^はを切^きると

そ^{その}のま^まま続^{つづ}けて

「私^{わたし}のモノに

な^なったんだから…

そ^それでい^いいつて…ね」

そ^そう言^いうと

怖^{こわ}いくらいに

あ^あたし^しを真^まっ直^すぐに

見^みた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0716x/>

人魚たちの復讐

2011年10月31日16時20分発行